共同研究報告書

2023（令和5）年度　東北アジア研究センター共同研究報告書

提　出　2024(令和6)年3月21日

代表者　高倉　浩樹

（本報告書はセンター内外への公開を原則とします）

研究題目	和文）ウクライナ侵攻後のロシアからの大量出国とモンゴルにおける民族間関係 英文）Russian exodus after the War in Ukraine and the inter-ethnic relations in Mongolia			
研究期間	2023　（令和５）年度　～　2025　（令和７）年度（3年間）			
研究領域	（A）環境問題と自然災害　（B）資源・エネルギーと国際関係　（C）移民・物流・文化交流の動態　（D）自然・文化遺産の保全と継承　（E）紛争と共生をめぐる歴史と政治 ［以上から最も近い領域を一つ選び、他を削除］			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	高倉浩樹	センター・教授	社会人類学	代表・民族誌調査
	堀内香里	日本学術振興会特別研究員	モンゴル史･モンゴル地域研究	歴史分析・現地調査支援
	Dalaibuyan Byambajav	University of Queensland	環境社会学	社会調査
研究経費	学内資金	センター長裁量経費　［金額］　30万円		
	外部資金（科研・民間等）	人間文化研究機構東ユーラシア研究　760万円		［小計］760万円
	合計金額	790　万円		
研究の目的と本年度の成果の概要（600-800 字の間で専門家以外にも理解できるようまとめてください。）	本研究の目的は、2022年2月以降のロシアのウクライナ侵攻後のモンゴルへのロシア国民の大量出国と、これに対応するモンゴル国やモンゴル社会の対応に関する基本情報を収集し、インターネットやマスコミ情報の分析、モンゴル国における社会調査や民族誌調査を行うことで、大量出国がもたらす東北アジアの民族間関係の影響を評価することである。 初年度はこの問題に関わる文献調査および予備的な現地調査を二度行った。ウクライナ侵攻に関わる人類学的研究は、ウクライナ難民調査が主で、ロシア避難民については限定的であった。しかしそのなかにあってブリヤートについての研究はすでに出版が行われているが、時事報告的なものが多く、本格的分析は十分行われていないことが判明した。現地調査においては、6月と10月に行った。オンライン併用の面談調査も行い、合計で50名ちかいモンゴル国におけるブリヤート避難支援者およびブリヤート避難者と面接を行った。その成果は、モンゴル国においてブリヤートの支援組織が複数有り、それぞれが異なる立場と目的をもっていたこと、さらに避難者のブリヤートとの意思の齟齬の可能性があることが示唆された。本格的な分析は今後の課題である。			
本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール	この研究は、現代ロシア研究にとってセンターならではの視点つまりロシア研究とモンゴル研究を交差する形で実施できる点が大きなポイントである。メンバーのなかにはモンゴル人研究者（オーストラリア大学所属）も含まれ国際共同研究になっている。また日本学術振興会特別研究員も含まれ次世代育成の効果もある。現地調査にあっては、本センターが中心となった大学間協定のモンゴル科学アカデミーも訪問し、現地調査実現に支援をいただいた点は国際学術交流の発展のうえでも重要である。			
研究集会・企画	研究会・国内会議・講演会な	国際会議：　0　回		

	ど：２回			
	研究組織外参加者（都合）：20　人		研究組織外参加者（都合）：　０人	
研究成果	学会発表（　）本	論文数（　）本	図書（　）冊	
専門分野での意義	［専門分野名］ 文化人類学	［内容］ ・講演会 Human-animal communication and collaboration among nomadic herders of Mongolia and South Siberia/C. Marchina（INALCO, 客員准教授、2023／12／19、センター ・講演会 An undivided ‘natureculture’ approach? The potential of overcoming the nature/culture divide in the study of human-animal domestication/ F.Stammler (Univ of Lapland), 2024.1.9,センター		
学際性の有無	［　有　］	参加した専門分野数：［３］　分野名称［文化人類学、歴史学、社会学　　］		
文理連携性の有無	［　無　］	特筆事項：		
社会還元性の有無	［　無　］	［内容］		
国際連携	連携機関数：　2		連携機関名：モンゴル科学アカデミー、モンゴル国立大学	
国内連携	連携機関数：　1		連携機関名：　東北学院大学	
学内連携	連携機関数：　1		連携機関名：　文学研究科	
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数：　５		参加学生・ポスドクの所属：環境科学研究科・文学研究科	
第三者による評価・受賞・報道など	なし			
研究会計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	初年度に文献研究と予備調査を行い、一定の見通しをえたことは重要な一歩である。モンゴル側の研究機関とも交流し今後も調査に関わる支援をえられることとなった。さらにこの問題を中心とした科研費（Ａ）を申請し、2024 年度から採択されることとなった。			
最終年度	該当　［　無］			

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

［学会発表］

・高倉浩樹，堀内香里，ビャンバジャフ「ウクライナ侵攻後におけるロシア避難民とモンゴルにおける民族間関係」第100回 東北アジア研究談話会 2023年10月30日

・堀内香里「近世モンゴルにおける家族」2023年度 比較家族史学会 春季研究大会、吹田市、2023年6月24日

［雑誌論文］

Takakura, H., Horiuchi,K., B. Dalaibuyan (in press) Unrequited compassion across the border: Complexity behind Mongolian support for fleeing Russian Buryats after the mobilization. Kasten, E. et al. ed. Fractured North. Berlin: Kulturstifung Siberien gFmbH.

［その他］

講演

Horiuchi, K Moveable Boundary: Governing methods in Mongolian Nomadic Society during the Qing Period, MIASU seminar, Cambridge, 2024.3.05

＊ファイル名は KyodoRpt_年度_代表者ローマ字とする。二つある場合、代表者名の後に１，２と記入する（例 KyodoRpt_2013_oka1）。